

若者の結婚意識についての日韓比較分析

—— アンケート調査に基づいて ——

A Comparative Analysis of the Youths' View on Marriage between Japan and Korea —Based on the Questionnaire Survey

久 野 和 子

キーワード：結婚意識、アンケート調査、儒教的伝統、近代結婚、ポストモダンの結婚意識

要 約

本学キャリア・コミュニケーション学科が平成20年度日本と韓国の高校、短大、大学で実施した結婚アンケート調査のデータ結果に基づいて、日韓比較分析を行った。日本の学生の間では、儒教的伝統の結婚意識は薄れており、西洋の「近代結婚」的な結婚意識が「あこがれ」とともに浸透していることが分かった。一方、韓国の学生の間では、儒教的伝統の結婚意識と西洋ポストモダンの結婚意識とが共存していることが分かった。そのせめぎあいが現在の韓国の深刻な未婚化、晩婚化を招く一要因となっているのではないかと考察した。

1. はじめに

本学キャリア・コミュニケーション学科の現代 GP プログラム「地域・大学インタラクシオン型の学習事業—理論・実践一体型教育プログラム『ACT 山手』の構築—」の取組の一環として、平成20年度に日本と韓国において「ブライダル・アンケート」調査が実施された。調査対象者は、日本の関西圏および周辺の高校生・大学生、そして韓国ソウルの高校生・大学生である。筆者はそのアンケート作成から、データ分析、調査結果の報告書作成にいたるまで関わらせていただいた。そして調査の集大成として、集計結果の報告・検討のためのシンポジウム（「若者と結婚」日韓結婚意識調査報告シンポジウム2009/9/24）が先頃開催され、短い限られた時間内にも関わらず、参加者による地域活性化やキャリア教育にまで及ぶ発展的な議論ができ、一定の成果を得ることができた。とはいっても、日韓の若者の結婚意識についての比較検討については、時間的な制約があり、あまり踏み込んだ議論はできなかった。そこで、せっかく講師の先生がたから色々興味深いご報告や貴重なご指摘をいただいたので、それらをふまえて、もう少し筆者が議論を深めてみたいと考えたのが、本稿執筆の動機である。

2. 研究の目的

戦後、日本も韓国も世界が瞠目するような経済成長を遂げたが、1980年代を過ぎてからは、日本はバブル崩壊、韓国は IMF 危機によって経済危機を迎え、現在においては若者の非正規雇用および失業率の増加、晩婚化、未婚化という共通の課題を抱えている。国際政治学者 S. ハンチントン（1996）は、日本を特別な独自の文明圏に位置づけたが、一般的には日本は韓国や中国とともに東アジア儒教圏に位置づけられており、本稿もその儒教的類似性に着目したい。すなわち、日本と韓国は、文明文化的にも政治経済的にも社会的にもきわめて類似性の高い国であるという認識を持つ。その上で両国の将来を形成する若者の結婚意識について、アンケート調査結果に基づき、実証的に比較検討をおこない、その類似性と相互の独自性を見ることが本稿の目的である。

3. 問題の設定

ハンチントン（1996）は、これまでの世界の体制イデオロギーによる対立は、新世紀では文明文化の対立に移行すると説き、とりわけ大きな対立軸は、「イスラム文明圏と中華儒教文明圏の同盟」対「西洋キリスト教文明圏」であると説いた。現在、イスラム文明圏と西洋キリスト教文明圏の対立はテロ事件の続発で深刻化しているが、儒教文明圏と西洋キリスト教文明圏の対立は表面的には顕在化していない。特に儒教的伝統をもつ日本と韓国においては、これまで自国の近代化とは西洋キリスト教文化を取り入れることとほぼイコールであったため、儒教は今かなり衰退していると言われている。しかし、現在の日本においても韓国においても、儒教が社会や人々の日常生活の基層にあることは否めない。

では、儒教とは何か。日本では儒教はもっぱら倫理道徳思想であったが、韓国では儒教は宗教でもあった。韓国統計庁（1995）によると、韓国の宗教人口のうち21万927人（0.9%）が儒教を信仰しており、本アンケート調査でも宗教欄に儒教と答えた回答者が同じ割合で存在した（宗教有りの回答者のうちの約0.9%）。陳（1992）は、「儒教は朝鮮までは、そのままのすがたで伝えられたのに、日本では儒教から祭祀を抜いて、倫理、学問、教養としての儒だけを採用入れた」と述べている。儒教と一言で言っても、日本の儒教と韓国の儒教はその内容を異にしているのである。

以上のことに留意しながら、次節で分析の枠組みと指標について検討する。その際、基本軸を、大橋（2008）、呉魯平（2001）による日・中・韓の青年の家族観、社会意識の比較分析の方法を参考に、「儒教的伝統－西洋的近代－西洋的ポストモダン」とし、いくつかの先行研究の成果を援用しながら、主に日韓の若者の結婚意識における儒教的伝統と西洋キリスト教文明文化の影響について比較分析することを目指したい。また、本稿で言う結婚意識とは、「心理的・精神的な作用として、認知的・情緒的・意志的な側面をすべて含み、経験や学習を通じて個人が持つ」（パク・ヨンシン、1991）ようになる結婚に対する現実認識・価値志向・態度と

する。

4. 分析の枠組みと指標

大橋（2008）、呉（2001）および宮本・善積（2008）の先行研究に基づいて、「儒教的伝統－西洋的近代－西洋的ポストモダン」の指標となる構成要素を、日韓の若者の結婚意識の比較分析に必要な指標のみに限定して提示する。

4－1. 儒教的伝統（儒教的価値観）の結婚意識に関する指標

(1) 「孝」

一番重要な儒教的伝統理念であり、韓国では「孝道」とよばれている。加地（1990）によると、「孝」は、①祖先祭祀、②親への敬愛、③子孫繁栄からなる。そのため家系の存続が大きな命題として結婚に課せられる。日本では、儒教は仏教の中に融合されており、無意識ではあるが現代においても継承されていると考えられている。アンケート調査において、「孝」の保持を探るための質問項目は以下のとおりである。

- （質問項目） 質問21－3 子どもを持つ必要性
質問21－6 生涯独身は不幸
質問21－8 結婚には両親の賛成が必要

(2) 血統観念

大橋（2008）によると、血統観念とは、男系血統における「家（イエ）」もしくは「代」の継承、嫡長子相続、親子関係の重視、親族関係の重視、血族外婚、祖先崇拜、個人に対する「家」の優位などを含む。

- （質問項目） 質問20－2 子どもの性別
質問21－1 結婚による自己犠牲は当然
質問23－2 結婚式の重視

(3) 性別役割分担

儒教的伝統の男女の役割分担は、男性優位であり、愛情ではなく制度にもとづくものである。

- （質問項目） 質問15 収入・家事・育児の分担
質問16 理想の夫婦の形
質問21－2 夫は外妻は内

(4) 儒教的倫理道德意識

儒教は、「仁義礼智信」を説き、社会的規範や規律を重んじる。

(質問項目) 質問21-5 結婚には安定した収入が必要

質問21-4 できちゃった結婚はよくない

質問21-7 同棲するなら結婚すべき

4-2. 西洋的近代・ポストモダンの結婚意識に関する指標

日韓の近代化以降の結婚意識については、「近代結婚」とそれに対する批判から生まれた結婚意識（本稿では「ポストモダン結婚」と呼ぶ）とに区分し、比較検討する。

4-2-1. 「近代結婚」の指標

「近代結婚」とは、近代西欧において形成された「ロマンティック・ラブに基づく一夫一婦婚」（宮本、2008）である。例えば、愛情と性別役割分業に基づいた専業主婦の生き方が理想の一つとしてあげられる。

(1) 個人主義

「近代結婚」によって、制度や規範としての結婚が、個人の選択による結婚、つまり個人主義に基づく結婚へと移り変わった。個人主義については、様々な定義があるが、大橋（2008）にしたがえば、「集団や公的世界に対する個人的・私的な世界の優位、自己実現や個人的幸福の追求等を内実とする」概念である。結婚意欲、子どもの希望なども、自己実現や個人的欲求、個人的幸福の追求として理解される。

(質問項目) 質問9 結婚意欲

質問20 子どもの希望

質問21-6 生涯独身は不幸（－）

(2) ロマンティック・ラブ

「近代結婚」は、男女のロマンティック・ラブに基づく当事者間の結婚の合意による。したがって、子どもは夫婦の愛情の産物であるため、子どもを持つことが重視され、子どもがいれば離婚すべきではないという考えが支持される（大東、2001）。

(質問項目) 質問13 結婚希望理由

質問21-3 子どもを持つ必要性

質問22 子どもがいる場合は離婚すべきでない

(3) 性別役割分担

男女の役割分担は「近代結婚」の特徴の一つとしてもあげられている（善積、2003）。性差別ではなく、夫婦の愛情（ロマンティック・ラブ）に基づいた協力関係である点が、儒教的性別役割分担と大きく異なる点である。

（質問項目） 質問15 収入・家事・育児の分担

質問16 理想の夫婦の形

質問19 ライフスタイル

質問21-2 夫は外妻は内

4-2-2. ポストモダン結婚（近代結婚への批判）の指標

1970年代から欧米で盛んになった従来の「近代結婚」に対する批判の流れを汲む結婚意識、結婚形態を本稿では、西洋的「ポストモダン結婚」と呼ぶこととする。法律婚制度、婚外子差別、異性愛差別を批判し、性別役割分業に基づかない自由平等で自立した夫婦の生き方が、ポストモダン結婚の主流である。

(1) 自由・平等主義

自由・平等の精神は、社会的近代化を実現する価値として、家族主義と祖先崇拝の解体をもたらすものとして位置づけられる（富永、1990）。例として、法律、制度、家族に縛られない自由な生き方、性差別役割分業への批判、夫婦の平等・自立などがあげられる。

（質問項目） 質問9 結婚意欲（一）

質問15 収入・家事・育児の分担（一）

質問16 理想の夫婦の形

質問19 ライフスタイル

質問21-1 結婚による自己犠牲（一）

質問21-2 夫は外妻は内（一）

質問21-6 生涯独身は不幸（一）

質問22 離婚もやむを得ない

(2) 国家による性関係・婚姻の管理への批判（同棲カップルや婚前性交渉を可とする）

（質問項目） 質問21-7 同棲するなら結婚すべき（一）

質問21-4 できちゃった結婚はよくない（一）

質問23-2 結婚式の重視（一）

5. 結婚意識の比較分析と考察

この節では、第4節に掲げた質問項目について、アンケート調査結果報告書に基づき、日韓の集計結果を比較検討する。なお、アンケート質問・回答項目内容とデータ集計結果の詳細については、『ブライダル・アンケート日本・韓国比較集計結果報告書』（2009）をご参照いただけたら幸いである。

5-1. 儒教的伝統（儒教的価値観）についての結婚意識の日韓の比較

儒教的伝統の保持を推し量るための対象質問項目と回答比率は表1のとおりである。

- (1) 「孝」の観念に関しては、韓国の方が日本より強く見られる。特に、独身観については、日本よりもかなり保守的な傾向が見られる。これは、韓国における「シングルの生きづらさ」（岡田、2009）も背景にあると思われる。また、結婚したら子どもを持つべきだ、結婚には両親の賛成が必要だという回答も韓国の方が多く、「孝」の価値観は韓国の若者の間にまだしっかり根付いているようだ。
- (2) 「血統観念」の保持に関しては、子どもの性別については、韓国よりも日本の方が男児選好の回答が多く、儒教的価値観が見られる。一般的に男児選好と言われる韓国ではあるが、本調査対象のソウルの若者に関しては女兒の方が選好されている（19%）。また、性別を問わないという回答が日韓ともに最も多く、子どもの性別に関しては両国の若者とも儒教的価値観が薄れている。次に、家庭を守るための自己犠牲に関しては、日韓ともに肯定的な回答

表1 儒教的価値観を示す回答の比率

質 問 項 目	指標	日 本	韓 国
質問15 収入の分担（夫）	（3）	44% >	18%
質問15 家事の分担（妻）	（3）	39% >	11%
質問15 育児の分担（妻）	（3）	11% >	10%
質問16 理想の夫婦の形（夫リード）	（3）	23% >	8%
質問20-2 子どもの性別（男児選好）	（2）	23% >	10%
質問21-1 結婚による自己犠牲	（2）	74% <	77%
質問21-2 夫は外妻は内	（3）	45% >	16%
質問21-3 子どもを持つ必要性	（1）	42% <	52%
質問21-4 できちゃった結婚はよくない	（4）	57% <	66%
質問21-5 安定した収入	（4）	88% <	90%
質問21-6 生涯独身は不幸	（1）	35% <	56%
質問21-7 同棲するなら結婚すべき	（4）	49% <	60%
質問21-8 両親の賛成	（1）	88% <	91%
質問23-2 結婚式の重視	（2）	76% <	84%

*（-）は、否定的回答をあらわす。

の割合が高く、伝統的な家族主義が両国ともに見られた。結婚式を挙げることに關しては、韓国は非常に重視しており、これは、「新郎家族と新婦家族との社会關係の生成」（岡田、2009）を祝い、告知するという韓国の伝統的婚礼の特徴が反映されていると考えられる。

- (3) 性別役割分担については、日本の方が韓国よりもかなり肯定的な回答が多く、夫は外で稼ぎ、妻は内助の功といった夫唱婦隨の考えが日本の若者にある程度保持されている。韓国では、性別役割分担に關しては、否定的な回答がかなり多く、儒教的性別役割分担の觀念はかなり薄れている。
- (4) 結婚に關しての儒教的倫理道德意識や規範意識に關しては、韓国の方がより保持されており、できちゃった結婚や同棲に対しては否定的な回答が多い。

まとめ

性別役割分担をのぞくと、総じて、韓国の若者の方が日本の若者よりも、「孝」や倫理意識、規範意識を中心に、より儒教的な結婚意識を保持している。また、血統觀念については、日韓ともに男兒選好が薄れ、近代化されている。これは、調査対象の両国の若者たちが、家父長制の伝統的大家族の中ではなく、都市に住む（共働き）夫婦と子どもだけの核家族の中で育ったことが影響しているのではないか。

5－2．近代結婚の結婚意識についての日韓の比較

表2 「近代結婚」的価値観を示す回答の比率

質 問 項 目	指標	日 本	韓 国
質問9 結婚意欲	(1)	82% >	78%
質問13 結婚希望理由（情緒的、精神的理由）	(2)	81% =	81%
質問15 収入の分担（夫）	(3)	44% >	18%
質問15 家事の分担（妻）	(3)	39% >	11%
質問15 育児の分担（妻）	(3)	11% >	10%
質問16 理想の夫婦の形（夫がリード）	(3)	23% >	8%
質問19 ライフスタイル（専業主婦、子育て後仕事復帰）	(3)	58% >	46%
質問20 子どもの希望	(1)	80% >	75%
質問21－2 夫は外妻は内	(3)	45% >	16%
質問21－3 子どもを持つ必要性	(2)	42% <	52%
質問21－6 生涯独身は不幸（－）（不幸ではない）	(1)	63% >	42%
質問22 子どもがいる場合は離婚すべきでない	(2)	38% >	24%

*（－）は、否定的回答をあらわす。

- (1) 「個人主義」に関しては、結婚意欲、子どもの希望など、日本の方が結婚において個人的幸福を追求する傾向が強い。特筆すべきは、日本は生涯独身は不幸な生き方ではないとする割合が高く、独身生活も個人的幸福の一形態と考える個人主義が認められる。
- (2) 「ロマンティック・ラブ」については、日韓ともに「好きな人と一緒に暮らしたいから」結婚するという回答が一番多く選ばれている。子どもがいる場合は離婚すべきではないという考えについては、日本の方がより肯定的回答が多く、結婚したら子どもを持つべきという規範的な考えに対しては、韓国の方がより肯定的な回答が多い。
- (3) 「性別役割分担」に関しては、収入・家事・育児の分担、理想の夫婦の形、夫は外妻は内、ライフスタイルなどすべての項目において、日本の方が韓国よりもかなり肯定的な回答が多い。こうした日本の強い「性別役割分担」意識は、上述のようにロマンティック・ラブに基づいているため、儒教的伝統よりも、「近代結婚」に属するものであると考えるべきであろう。

まとめ

総じて、日本の若者の結婚意識は、韓国よりもかなり「近代結婚」的である。日本の性別役割分担への支持については、5－1の儒教的伝統と重なる指標であるが、上述の通り愛情にもとづくものであるため、近代結婚の結婚意識ととらえるべきであろう。

5－3．ポストモダン結婚の結婚意識についての日韓の比較

表3 ポストモダン結婚（「近代結婚」への批判）を示す回答の比率

質 問 項 目	指標	日 本	韓 国
質問9 結婚意欲（－） →結婚したくない	（1）	9% <	15%
質問15 収入の分担（－）（平等）	（1）	31% <	57%
質問15 家事の分担（－）（平等）	（1）	40% <	65%
質問15 育児の分担（－）（平等）	（1）	69% >	66%
質問16 理想の夫婦の形（平等）	（1）	52% <	68%
質問19 ライフスタイル（専業主婦と一旦退職以外の選択）	（1）	38% <	48%
質問21－1 結婚による自己犠牲（－） →自己犠牲しない	（1）	24% >	21%
質問21－2 夫は外妻は内（－） →夫婦自立平等	（1）	59% <	82%
質問21－4 できちゃった結婚 →婚外子可	（2）	41% >	32%
質問21－6 生涯独身は不幸（－） →独身幸福	（1）	63% >	42%
質問21－7 同棲するなら結婚すべき（－） →同棲可	（2）	49% >	38%
質問22 離婚もやむを得ない →離婚可	（1）	55% <	69%
質問23－2 結婚式の重視（－） →式軽視	（2）	10% >	9%

*（－）は、否定的回答をあらわす。

- (1) 「自由・平等主義」に関しては、韓国は肯定的で、男女平等・夫婦自立の考えが強く、ポストモダンのである。ライフスタイルも韓国の方が、自由な生き方をより多く望み、離婚も愛情がなくなればやむを得ないと答えた若者が多く、総じて日本よりもポストモダンのである。ただし、独身に関しては、上述のように韓国社会では生きづらいので、否定的な回答が多い。その一方、韓国では結婚したくないという回答が日本より多く見られ、結婚制度にこだわらない、もしくは厭うポストモダンの考えが個人の内面において進行していると推察される。岡田（2009）はこの回答結果は注目すべきだと指摘し、韓国の若者の結婚願望が日本より総じて低いことを問題視している。
- (2) 「同棲や婚前性交渉」に肯定的な回答は日本の方が多く、ポストモダンの傾向が見られる。韓国は反規範的な事項に関しては、否定的な回答が多く、規範を重視する儒教的な傾向がみられる。

まとめ

総じて韓国の若者の結婚意識の方が、日本の若者よりも「ポストモダン結婚」的である。ただし、儒教的規範意識は強く、個人のポストモダンの考えと伝統的社会的規範とを合わせ持っているのが、韓国の特徴である。たとえば、個人的な結婚願望は日本より全体的に低い傾向にあるにも関わらず、独身は不幸だとする回答は多いなど、一種の矛盾が韓国の若者の結婚意識に見られる。

6. 結婚式スタイルの選択における日韓の比較検討

上述の指標による分析では取り上げられなかったが、儒教的伝統と西洋キリスト教文明の対立軸が、宗教と結婚式のスタイルの選択においても日韓において象徴的に見られるので、紹介したい。

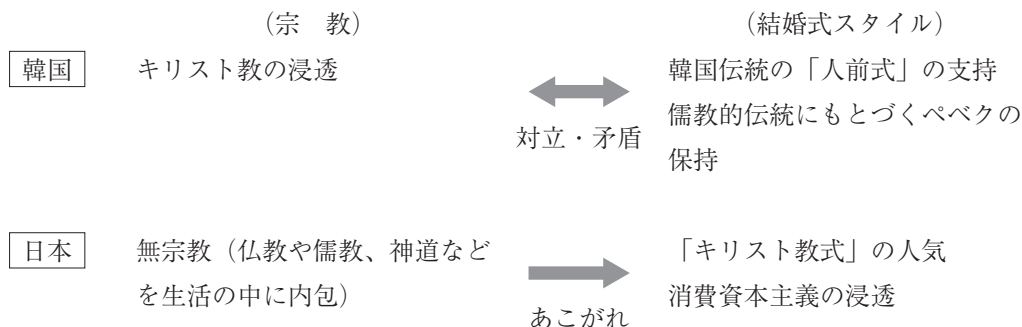
韓国の本アンケート結果では、キリスト教信者が約半数を占めたにも関わらず、韓国伝統の「人前式」の結婚式を、全回答者の7割以上（71.5%）が希望した。一方、キリスト教式を希望したのは全回答者の19.6%にすぎなかった。キリスト教信者の若者ですら、その多くが、キリスト教式結婚式でなく、韓国伝統の「人前式」の結婚式を選択したのである。また、「人前式」を選択した主な理由は、アンケート結果によると、「宗教的理由」でなく、「一般的で無難」であるし、「多くの人に参列してもらえる」からとなっている。さらに、結婚式の服装について考察すると、アンケート結果でも実際の式においても、ウェディングドレスが主流となっているが、結婚式の後に行われるペバク（結婚儀式）では必ず韓国伝統衣装が着用される。一般的に、韓国ではたとえキリスト教信者でかつキリスト教式の結婚式をおこなったとしても、韓国伝統衣装を着用したペバク（結婚儀式）をほぼ必ず行うようである。

他方、日本のアンケート結果では、無宗教（とはいえ、仏教や儒教や神道が日常生活の中に

内包されている」と答える人が大部分であり、キリスト教信者は非常に少ない（アンケート結果では6%）。しかし、それに関わらず、ウエディングドレスを着用した「キリスト教式」の結婚式が実際に多く執り行われ（2007関西ゼクシィ調査によると64.9%）、また希望されている（アンケート結果でも64%）。しかし、だからといって結婚式を機にキリスト教信者となるわけではない。あくまで、あこがれのイメージの結婚式スタイルとして「キリスト教式」が選択されたにすぎない。これは、「あこがれ」が「キリスト教式」の結婚式の圧倒的な選択理由であるというアンケート結果からも明らかである。

すなわち、韓国の結婚式においては、伝統的社会基盤の儒教と近代化の過程で摂取された西洋キリスト教との対立・矛盾の構図が想定される。一方、日本においては、儒教、仏教、神道が深層で混在する伝統的社会基盤が弱体化しつつある中、西洋キリスト教文化へのあこがれによる無批判なスタイルの模倣へと移行していることが想定される。日本と韓国における宗教と結婚式スタイルの選択との関連を図に表すと以下の通りとなる。

図1 日本と韓国における宗教と結婚式スタイル



次に、結婚式と消費資本主義について簡単な省察を付け加えたい。他の社会的事象と同様に結婚というフィールドにおいても、近代化は西洋キリスト教文明とともに、消費資本主義をも導入したことを忘れてはならないだろう。特に日本は、韓国に比べて、結婚におけるポストモダン的な消費資本主義の浸透が顕著である。日本では、上に述べたように、「キリスト教式」の結婚式を挙げても、キリスト教徒になるわけではなく、形式の模倣だけである。それはあくまで表層的な西洋キリスト教化であり、より深層的には消費資本主義の浸透が見られるのである。

例えば、日本では「ゼクシィ」を筆頭に様々な結婚情報雑誌が毎月多数出版されており、結婚が決まったほとんどの女性が参考にしている。それには、青い海や緑あふれる森などを背景に建つ白亜のチャペルや、純白のウエディングドレスを着た可愛い女性が幸せな微笑みを満面にたたえた写真などが溢れ、それがいつしか若い女性たちの「あこがれ」のイメージとなっていく。すなわち、日本では、結婚式についての情報は、今や雑誌や本、テレビ、インターネッ

トなどのマスメディアを通して提供されており、それが一般的にイメージ化され、商品化されているのである。つまり、結婚式はポストモダン的な消費資本主義における消費対象となっているのである。消費者（結婚願望のある若い女性）はセグメント化され、それぞれのニーズや嗜好に合った結婚式や披露宴が、メディアや結婚業界によってイメージ商品として提供されているのである。

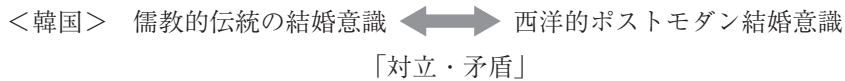
一方、韓国では結婚情報雑誌は数紙（『Wedding 21』『The Wedding』『My Wedding』など）発売されているが、発行部数も少なく、まだ日本ほど一般的に普及していないようである。また、日本では結婚式や披露宴に関するマナー本やハウツー本、ガイド本、などが数えきれないほど存在するが、韓国では非常に少なく、ほとんど目にしない^{（注1）}。韓国の結婚適齢期の女性数人にインタビューした^{（注2）}ところ、結婚が決まってもそうした結婚情報誌や本を参考にする人は少なく、様々な結婚に関する情報や知識、慣習については親族や友人、経験者、専門家などから直に教わったり、見たり聞いたりするのが一般的であるとのことだった。すなわち、韓国においては、結婚式をあげる際、マスメディアによる情報や、個人的に信仰している宗教よりも、親族や友人などの人間関係や地域が維持している慣習や伝統文化などの方がより重視される傾向があると考えられる。これは、「人前式」の結婚式を選択した主な理由が「一般的で無難」であることと「多くの人に参列してもらえる」ことというアンケート結果からも実証される。

以上を鑑みて、結婚式、および若者の結婚式についての考えに関して述べると、韓国ではそれらはまだ韓国伝統の儒教文化社会の中にしっかり根付いており、まだ日本ほど西洋キリスト教や消費資本主義の影響を受けていないと考察される。しかし、実社会全般については、まったくその逆で、韓国は日本よりもその両者の影響を大変強く受けていると思われ（西洋キリスト教の信者の割合は日本よりも圧倒的に多く、消費資本主義も日本より浸透していると言われる）、ここでも韓国の若者の結婚意識におけるせめぎあいが見られるのである。

7. 考察とまとめ

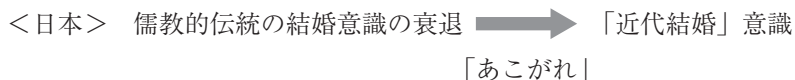
韓国では、核家族の都会育ちの若者たちが、儒教的な結婚意識を現在も強く保持していることがわかった。それは、日本と違い、韓国では、儒教は倫理道德思想であるばかりでなく、先祖や家の祭祀を行う宗教としての側面もあるため、人々の精神性や社会意識の深層にまで入りこんでいるからではないだろうか。その儒教的伝統の中へ、「近代結婚」が十分実現されないうちに、急速に「ポストモダン結婚」の結婚意識が入り込み、若者の間に浸透していると思われる。そして、「ポストモダン結婚」は、家族主義と祖先崇拜の解体をもたらすため、儒教的伝統とのせめぎ合いを若者の中に生起させているのではないだろうか。さらには、そのせめぎ合いの狭間における若者の葛藤や迷いが、晩婚化、未婚化を生み出す要因の1つとなっていると考えられる。

図2 韓国の若者の結婚意識



一方、日本では、儒教的伝統の結婚意識は薄れてきており、「近代結婚」が若者の結婚意識の主流となっていることが明らかになった。そのため、日本の若者の伝統と近代化とのせめぎ合いは韓国のように強くはない。儒教の弱体化→近代化（→ポスト近代化）とつながっており、韓国のようにギャップがないからである。さらに、日本においては、西洋キリスト教文明への強いあこがれや外国文化をうまく日本化して摂取するという日本独特のお家芸が、弱体化した儒教的伝統と急速な近代化との葛藤を易々と凌駕し、西洋由来の「近代結婚」がある程度スムーズに形成され、若者に支持されているものと考えられる。独身や同棲を認める自由主義的なポストモダンの結婚意識が形成されつつあることもデータ結果から認められたが、日本では、主として性別役割分担や個人主義、子どもの重視を中心に、「近代結婚」が現代の若者の結婚意識の多くを占めていると考察される。さらに、その「近代結婚」的結婚意識の確立が、ポストモダン結婚への移行を阻んでいるのではないかと推察される。

図3 日本の若者の結婚意識



大橋（2008）は、社会意識の研究において、「日本の若者は、『近代的なもの』を無意識のうちに内面化してきており、一方、韓国の若者は、さまざまな葛藤要因を内包しながら、それを摂取・受容している」と本考察とほぼ一致した見解を示している。また、日韓において非婚化、晩婚化という問題が深刻になった背景には、「儒教的価値観がしっかりと染みこんでいる土壤に、近代的男女平等思想を覆い被せようとしたからなのではないか」と酒井（2009）は論じている。岡田（2009）は、韓国の結婚は、伝統的な濃密な家族関係をもとにする「家族志向の婚姻」と都市型核家族を形成する「恋愛至上主義の婚姻」とに二極分解していると説明する（まさに、前者は儒教的伝統の結婚であり、後者は、ポストモダン結婚が当てはまる）。韓国の若者の結婚は、儒教的伝統と西洋的ポスト近代に二極化し、結婚意識においては、両者がせめぎ合っているのである。そしてこのことが、若者の結婚への迷いやためらいを生んでいると考えられる。

さて、ハンチントンの儒教文明圏と西洋キリスト教文明圏の対立は、韓国の若者の結婚意識において確認された。同じ儒教国である日本ではそれがあまり見られなかったのは、やはりハ

ンチントンが指摘するように日本が独自の別の文明圏に属するからであろうか。これから日本の「近代結婚」はどう変化していくのか、韓国における若者の葛藤がどのように解決されていくのかをこれからの両国の社会的変化とともに注意深く見ていきたいと思う。

参考文献

- [1] S. P. Huntington, 1996, *The Clash of Civilization and the Remaking of World Order*, Georges Borchardt, Incorporated. (S. P. ハンチントン著, 鈴木主税訳, 1998, 『文明の衝突』 集英社)
- [2] 大東貢生, 2001, 「東アジア地域の青年におけるジェンダー意識」『日・韓・中における社会意識の比較調査』 佛教大学総合研究所紀要別冊2001年7月
- [3] 大橋松行, 2008, 『体験的国際比較調査論－儒教文化圏の若者意識調査』 サンライズ出版
- [4] 加地伸行, 1990, 『儒教とは何か』 中央公論社
- [5] 金哲秀, 2001, 「韓国における青少年の社会意識の現状」『日・韓・中における社会意識の比較調査』 佛教大学総合研究所紀要別冊2001年7月
- [6] 呉魯平, 2001, 「伝統的価値観と近代的価値観並びにポストモダン価値観の同時並立可能性」『日・韓・中における社会意識の比較調査』 佛教大学総合研究所紀要別冊2001年7月
- [7] 酒井順子, 2009, 『儒教と負け犬』 講談社
- [8] 善積京子, 2003, 「＜近代結婚＞の揺らぎ：スウェーデン社会からきた結婚の意義」, 『家族社会学研究』 日本家族社会学会, 第14巻第2号
- [9] 富永健一, 1990, 『日本の近代化と社会変動』 講談社
- [10] 陳舜臣, 1992, 『儒教三千年』 朝日新聞社
- [11] パク・ヨンシン, 1991, 「韓国青少年の意識構造」『青少年文化の実像と問題』
- [12] 宮本みち子, 善積京子, 2008, 『現代世界の結婚と家族』 日本放送出版協会
- [13] 岡田浩樹, 2009, 「シングルと『ファミリー』の間に－現代韓国社会における『結婚市場』の変容と結婚・家族観の揺らぎ」『若者と結婚』 日韓結婚意識調査報告シンポジウム, 2009年9月24日 (<http://gp.kobe-yamate.ac.jp> 2009/10/30アクセス)
- [14] 『ブライダル・アンケート日本・韓国比較集計結果報告書（平成20年度実施《平成20年9月～10月末実施》）－単純集計・クロス集計－』 2009年9月, 神戸山手短期大学
- [15] ゼクシィ net 編集部, 2007, 「結婚トレンド調査2007（関西版）」 (http://www.recruit.jp/library/bridal/B20071022_04/docfile.pdf 2009/10/23アクセス)

注釈

（注1（注2 2009年3月韓国での筆者の現地調査に基づく。